四時[illegible] 乾

へ 5
1496
1

ゆふべの空いとあさみどりの月
すこしおぼろなるに梅の香
さそふ春風の香をちこちに吹わたし
市中にはたえずおとす流れの三条
ありありと向峰の松山言通て平し
みなちかく東山もまぢか閑なれ

利門 1496 1

ふるき年睡もまどかなる垣の葉
衣もしほたれてなみだハ月
あかね顔にみゆるおもしハ
戸の隙にまもしろきたもと
昨日の夜ハ池の井の波のうつし
聞けるにあさへうすかれ地
してけ世のおもてさそやぶる

なまぬるの風にそのふきあふてハ
月のやれそへうらみしかいく虫のなく
こころなりしま虫の音の寒さに
のるる枕毎年めしけるや
めしてのあら寒ニさまされ
いと陣々に松のしくにおきて峯
さへあはれにまくし宿ん笛松の

めし風流に世をつきすくしを
紙たゝかくしへ志のふところ風
月つゝみて一生を捧けの花を
人この四季の時のうつりもあはれんと
いふへ今を論せ才遠近の情
を語るになるへしさるハ志ぬ
との流派よりも喜とて

ちのく梁までも此風月に
よするなし
文化八年未晩秋
かめくふ　石蘭

凡例

為はくし交り咲生貞為の余情をとう
作し風月の趣ひを集むゆかりも
あらはれし季ふあらはゝ句を求るふ
用ゐしされハ一々俳光の為なれ作へたん
やさし季の詞りきすの盛ハ歌のみとし
もたらしよりて其名同乃句と将ん
とまふされハ不易流行よしあるのきにあ
なつしまたときしらさちうきとをとめん
世の人ふあらしむへふあらひ歌の深さる

をかしうをもこよまへすこいふうろこと
けふまりに入ん海乃人の様わなり
ね飛谷れちつきハ全此の連をしめふありて
ほとりなつたまのハ例乃首尾をとしつ
編くし

四時乃は哉 乾

暮柳亭車大著

春乃部

春乃月

おほれとやゆくなへしけるの月　ヱト 成美

梅乃後ハ眉りうちるりまされ月　スリ 岳輅

まつの花乃月夜うちふそしなうり　京 蒼帆

けふの月はまに花うるさまうき　文雄

十日くねをそ路近の月夜かな　江戸 梅文

きぬ花へ小く見ゆれきぬの月　京 双南

まち乃月女子うらしの押出された　湖光

羽二重に包むやかゝりのちの月　甫鴻

のちの月見はまちやしたけれつき　ヨリ 外央

今の待つ薄へ帰ればのちの月　山居

のちの月十日は柿の白々し　紫明

はるかなのちに有しのちの月　季成

旅人の新は新たりけるのつよ　鬼佛

あかさの香りやうかやのちのつた　且古

のちの月もとめしかつ待ちや　一桐

定かれは床しく寝しとその月　芦丈

傍妻人手汗くのちのほとよ　一好

のちの月鮮くして寒けれ　五美

けふも亦月のあゝ尋ねけり　兎文

園山もおしむそのちの月　宋保

山鳩の並木にうつるけふの月　今 亀毛

ちりむるのせりくも浅しのちのほとよ　伯芝

畑とうりやつをそれの月　臼湖

あれやとに遅くしけれつよ　君貌

大律の川きよりのちの待き　生蕉

鬼橘りもとふそくるの月　嵐丈

浮きさへのちの二きくのちつた　竹解

春の月やくるを待とてかり　ヱチゴ 於弦

いつまでのこして梅に入りもの月、　春江

百ちより梅さく枝しけるれ月　眉山

野草や春の月あまり出て家り　草均

ゐかけや雪乃姿やまれつゝ　小蘭

七種の上に見くりたるのほとき　半山

まの乃あるいは無柳出て春乃月　既举

何ともう豊に澤むけるれつゝ　林枝

莚上にうちれやまの月　亀兒

ふりゆのかいやくまるもかつた　梅丸

春の月暮て佐とつまり明る程　文演

つきのあなうて明けまれ月　篠春

池乃鴨さうしくなりぬるのつき　宇牧

しくゝりるまつきゆるもけるれ月　文舛

きぬしの裏にやさしいやまの月　雪史

百性乃棚先とよむやするれつゝ　峠山

須ゐでは出ぬ旅うちのけき　天圃

まの月ぬれも雨きくゝく　春羽

先にあやまうへありけ三日の月　八雄

桐の木ハ太つてつゝえて春乃つき　東大

近江路へ入てもらしまれ月　鹿古
夜山村は得しとありあるのつよ　無角
嫌ものへいしれけれ乃つき　一湊
総狗乗乃ゆきやまの月　其之
まろ人の枕とあらなれつ月　卜遊ち
大ちよの襟ならありけるのほき　鳳二
山ちや梅ありつるまの月　甫水
花もうれ夕宵さまの弥月夜　角丈
猫二つやあらしちてあのはよ　處村
羽さくし十日の月となりにけり　京宗也

朧

舟の寿る柳もちりちられつふ　アワミ無撲
浪しつら辞ての隠まの月　十六くわ女
住の山や何見立れん春の月　、百堂
白砂は伊吹やけ流れるのつき　ヌリ士朗
表のまさいーしか月の如あみ　和々
山乃まち一木二木乃梢かて　丁芳
常木のまりとあるあけり　白亀
まちらのゆきりや梢有　東見
梢あとよけれ逆た何するき　車大
後てもさ行所やそけん梢月　一湊

としのうちあらはしおもふく　風子
勝月はうち浮たつりくもも　芦文
ころもの音後のち面うたし　松雅
わうつくは菊木の照して後の月　蓼亭
住松のうち流くりおもふつよ　露英
四はやたにはるるおもふる月　奥支
後帰ところれは月をさ後の月　志口
山川のありて後の月夜かな　今 支羽
衣うつ人をおもふや勝つよ　黄泉
叩くさのくろりふ余るおもふる月　直緑

後月まつ門のこころはし　李月
後の夜や積るる人のこころ之　アミ 芳之
ひきうしと物はおもひや後の月　京 百佳
後のした夜流叢乃色音ふ　笑翁
まつ風の露折としてや出る月　宗保
おもふうまや松吹月に色　京イツ 其止
由良のみをおもふよりの後の月　九阜
芦花すに松葉こもる音や　イト 常風
後しも月の月に晴れ見るり　、一風
昨中るにゐて見おもふる月　、李石

うきことし藪郁しき秋の月　亀毛

おもしても去作に光琳二人連　米堂

星の影さらしもみふ秋の月　加小川 朴軒

高風乃音にさらけしおもつよ　壇芝

まさきん中らりの月乃おもろつふ　文経 曽川

秋の月ある女房乃一人則　平下 浮尺

踏ふて千里思ふも我ゆうの月　京 富山

しるく人の郷部をうりを秋つた　京出林 楊朵

則るれ代も声もしてなかろふ　京 蒼虬

夏月

夏の部

細きのへぬれてあるく夏の月　十八 升六

夏の月大川筋乃縁涼みつり　チクセン 歌舌

舟乃火の影を見て夏残つふ　く凡

夏の月芝川つて居さり　如丸

夜さ出てしてみて夜なり夏の月　冬蘿

簾に流れて夏乃つき　平蕪

わすりつ旅人のよのつた　蘿風

夏の月庭の小溝乃木積か、　平 雙蛇

清宵にてりやもやる夏乃月　蔦老

いさよのうたゝねなるの月　　升舟

硝子をいれさするや夏の月　　白竹

松風の手とりくるゝの涼しよ　　ゑ中

夏の月菜みなんと在るなり　　松丈

葛飾へ入日を慕ふかはのなき　　柳荘

絽衣の柔らかそよ夏の月　　有芳

入口の柳へくしまりれつよ　　其中

夏れ月ひかりあり不橋のうら　　文枕

兼ねうさしつの出ても夏の月　　江亭

夏の月つきれ松うしるふなけり　　良眼

ち涼し欄干わりきなりの涼よ　　壺仏

亀の甲あらわれ出る夏れ月　　琥珀

松の葉を返しても涼しさつき　　周堂

あたるのくもれ子や夏のつき　　春光

楼のぬれさやさしく月の涼よ　　栄則

寐さゝやうる涼しぬれり夏れ月　　一君

夏の月雲の表より流れまゝ　　自明

夏れつふるのとうきて白ひなり　　五雲

浜枝のけしくるしや夏の月　　鳳二

坂境のかくてまつさそれ月　　五楓

山藤森をくれつゝなほ夏の月　宗保

踊るべき秋も似たれど夏の月　角文

夏の月川より出たり人の声　甫水

湯帰り衣に露もなつの涼よ　野艸

夏乃月ゆるき貝の寄りもなり　一桐

桐の葉と待合ありて涼のさき　棣京

車よけて吹や牡丹に夏の月　春東

咲のあと埋もしろや夏のつよ　少冬

艸笛乃舟にとまりなつ乃月　女 叶一

此風は分ふらくるて夏のつき　其水

我うけの雲しくもり夏の月　巨涯

くれかゝる雨あとよりまたれつゝ　雪奂

森影し桃ならや夏の月　莱木

夏れ月川とうてえき恵れしや　梅宗

夏川のつよ涼てや出る深川　芦丈

我やしい二色涼しに夏れ月　雪人

りよ人の伴しもやなけのつよ　尾昇

一面み風ありよの常ややみ乃つれ　賦仏

夏の月あつて出しや一ころし山　蓁均

なつの月十二三夜乃涼ふなり　車谷

ある時はくらしけの跡る夏の月　浪花 泥〻舟

法師居らて悪し橋乃つよ　霞英

橋守の小屋焚けり夏の月　車大

艸の戸は茅のもえつゝ夏のつよ　京 茂良

寺風や前のうりしく月乃人　賞山

うけうてい江へきよや夏の月　我〻

秋乃部

盆月

花咲る人のうゝよまぎれ月　岳游

見うしる乃衣は花ありゝまつよ　亀毛

しきの月九十の月うしさゆした　車大

明は川のうらよあるよ盆の月　鳳子

まぎれつよおもてゝ人も来りそり　芦丈

ちつゝきにゝうは年よりきぎ乃月　法亭

旅人の衣も絹はなしんまのつよ　後窓

月影に度さまの咄はありさぎんれつき　一凌

けおしるうも合もちらし盆の月　五条 雪旅

初月

うすきれみゆるといへん初月夜　巨録

さのゝえ花のつれしらふあさる月哉　鬼林(ミヤクヨシ)

小坂乃そこらしも出て初つき夜　丘高

家の名乃まゝはら太るよるの月哉　車大

二日月光りて付し舟まち　六賀

ふかやしゝ家はまのかれ二日月　之楓

こうれ一人くらはたゞ且三日のつき　八旅

夕風の光り立なり三日ノ月　芦丈

三日の月星の有夜のそらしらぬ　亀毛

ゑるうなる夜風よつりや三日乃月　白汀

出るもしつ見えぬ初にまり三日の月　如竜(トヤセ)

三日の月何さりぬ落しましやうし　古木

待宵

何宵やあきくれのまたのへしく　可七

光さるゝ今のまゝ入りの木かけ月　車大

待宵やとはらしたれまるゝを　芦丈

まつはれや庭あるうけとゝしの露　奇開

名月

なてかそうれしや新に何ぞの月　千宵(ヲヘリ)

名月や行ちふとしてゆる　可都里(カヒ)

名月と人ものさくれ里　成美

名月や古ふ光りと橋のうへ　丘高

名月や海てまに仁の色　比良
名月や古今遊しぬ水乃色　渕鳥
名月の夜半に貝吹山辺りける　イセ 烏草
名月は世の中ちりの顔合せ　アフミ 亭女
名月のかくしくして枝に　白夜
名月の乃多い花なり夜のくせ　くるまと
名月や行ふつくろいくも世れ　ヒシコ 午後
名月や寺ぬ浪の淋しき山　サヌキ 首三
名月や舞うきさらしと人のうへ　儿龍
名月や百度押入る松乃町　不動 甫吹

名月や山のあるじも人の宿　希文
名月や子れ口ろ蜜の忘れ　内海
名月は秋の旅人の花とくり　成雉
名月や待乃花に手乃ひ　大翼
名月や薮のけるの実の道　生む 勝支
名月や浦と寝覚の手渡り　李月
名月は何を出てもくいのまの　角丈
名月や人を見るれ柄乃下　塘芝
名月やまゆうき雲の雲　甫水
名月の山月すしふめたり　錦峰

名月やうかうかとして人就し　甫尺

名月や西しに作り無りき　奥舩

名月や行人去りて月しぞ　菜帆

名月や寺のさわれハ忘らる　芦文

名月や其にくさまれて露のふ　梅李

名月や宵りぬれてそれにつく　涼之

名月や西しほうしの山のまわり　如亮

年々や名月の夜乃隅田川　紫吟

名月や影はさらにうしろさ　一湊

名月や宵かりしれて灵座に流　東大

名月や影ハ見所ありのまと　茂春

家ちゃうしれ今月のおまかさ　波山

今夕の月風をとらし波かうしま　伯宇

立ち返そ来るもみうらや今夕の月　羽白

冬三尺月ちうき五里や山乃果　李史

うしかて月にかくしとも見人ふ　壺仙

くうつさしもの舟さるつきそふる　牛嶽

笹のたもておきまての月見ぬふ　北門尾　美信

今夕の月秋かくり候ふ今りかれ　亀毛

照人待のかれき月の夕音ふ　友旅

しも降るになれゆくしなの月　花兎
夕ぐれの遊しさよ菊れ月　油丸
山風もくまなくしなしつゝよ　白阿
松かぜの舟に人まけのはれに　芦大
暁の積露の照る今宵の月　蓬仙
月ありて見えし目でとまりけり　桃居
名月のあまねき中やとれはのむ　呉陸
雨の月や空ちらしくれはすゝの声　其成
雲青秋人の月をとくしてまよ、　石然
父母の膝まくらかてこよひの月　甚る

尋ねるのうしたよ光る今宵の月　斜竹
[illegible]　尺艾
[illegible]月　菅山
名月の夜[illegible]佐の峰　蘆鳥
[illegible]今宵の月　三はし人
胡蝶の[illegible]しつよ　百老
名月に[illegible]車　士朗
いさ[illegible]月夜かな　卓風
[illegible]月のくもりなし　士朗

十六夜

迷[illegible]十六夜　升斎

月

いさよひもまたさらしなの郡哉　車大

ゆふくれの雨は晴らぬ秋の雨　賤仏

星の数てよみも同し十六夜　一窓

秋晴し一人二人乃十六夜　亭卜

いさよひや空にある山乃影り　純鶯

ゆくよひ白人の秋はくらくらし　一湊

いさよひや雁乃行る小さゝ哉　雪雄

ひかりなれは猶まれや宵月夜　士朗

曇りても暮れは月にめつらかり　康古

秋もそもちりたまのは月夜かな　甘谷

川かめや落つ水さそて秋の月　一湊

橋ちもたゝぬさうれし宵のつき　圓来

月の行波のかうり池乃松　槐亭

さんはの秋をしらて待た月　桃舟

月一ツ家は浪坊し二人か　田麻

みそふ出れは涼さうれし月夜か　野棠

夏てはつくく成そり秋の月　貞久

人中川やかつはあれも松乃つき　五水

辛崎の松それに近江の月夜か　喇門

萩つるは今宵月よりさらの戸の月夜　拙所

月あかりや流れる水の竹も早し　了宋
面白さは東風しやして月の名所　白亀
松に序風ふきりつ秋の月　め竹
名もしらぬ樹はさき月の光かな　麦羽
白きにも松や夜残し月　芦丈
秋やその松も出かかり月夜かな　梅濱
又見へ向にてうすれ旅の月　年緒
秋の月窓にこゆやさし風音　春羽
松しまや夜ては底迄の月　路文
月と伴ふ家へしてかやきかな　由卜

借る宿の跡え蘇へりし名月夜　松雅
月へ出る人乃行たえる那　虎文
飄しの宿見えにくりぬ秋の月　雪外
辻君乃雨やきせやすた乃月　女 茜
宿のたへいつも一人の月夜より　車大
百丈乃岩にもやはきのつゆ　一松
松風のすくしろを出る秋の月　梅山
月夜かし何ふとさしてりもそ　カヒ 之を卿
一日のうちた金より旅乃月　久旅
月よきふけりみえの伊勢まり　人元

雨の夜も寄れはあなよの月　雲帯

しくれる月と月にたる木風かな　蕉石

小やまて白砂は世ん秋の月　巨録

山寺は揺られてまた揺れつよ　吾年

みつさの人はなくたつよの海き　岳軒

雨も秋てはのかなる月夜かな　八ヶ房

皆人のあるくまもしや鳥は月　升外

大名や荒れをされて月の秋　卜 蛙聴

さりとても月のなにむかうり　湾五

生酒や月夜かしの手ぬり　嵐二

かりかかなれて月出る月の雲　崇 帆亭

月のふ田松原打つくる乃所　坂月

菊しを落ちへ傾く月はすし　卯謝

夕くれの山はみなしれ秋の月　杖住 齋毛里

大寺はたれは四方りは乃つよ　棲霞

月の出なあるまちふ芭蕉かな　石部 月絢

更科とうしろかつても月夜かな　美扉

松されて月に願くさ啼ふ花　浮瑞 思竒

さて行や山もさかれて秋の月　旧敞

一枕も月ちつきよみはなりけり　十六 茶元

後月

こゝも都よ車よせけり後の月　岩翁
挑灯ぞ出れハまた中さ月夜かな　木偶
みすしろへすゝふ戸させぬ秋の月　月居
猶すゝみ定る庵をとのちれつゝ　くう風
後の月出てりけれ是ちら欲　文旅
まくらする山ていまたう後の月　良宗
まりし後の露しら町前よ後の月　路文
いつ迄も木の枯れ田やのちれつゝ　奥人
鶏の声さや寝くさ後の月　竹阜
後れ月切りへまつ山を渡りける　東鶴

後の月尾花のなをもあれいけり　芦文
葉枕の玉もうかめて後の月　芝に
後の月空嵩ハ花の咲さ路　京卯
後のつよりけ影うくき影ちかな　孤舟
出けしし千のちうや後の月　湝凉
舟もさや荻うあつけ後の月　麻直
白まくれ杖を乱せし後の月　人禾
後の月水の様はハ人もまた次　串大
戸守れハうさ門や後の月　一杉
ちいさもえまうし後の月つよ　梓江

荒海のうつて出るよ后の月　千本

冬の部

冬月

戸にうつる竹の影や冬の月　蒼虬

冬の月猪の通る野寺かな　如柏

獣の市中をさ晴しよ上ゆの月　荒丈

不二より高きとみゆる冬の月　伯芝

山橋の雅て更けし上ゆ見つき　君貌

松の影も楽をよしそこの冬の月　高岳 花嵐

めづらしき出て松の間もし上ゆの月　九皐

冬の月田中の家の一つ窓　ノト 哀多

上ゆの月先ふ雨よりすゝし　やゝと

蓮の茎ゆれしわかるゝ冬の月　宗保
そば乃落葉めぐりぬれつよ　甫尺
一風ハ松をゆりて冬の清き　石由
ちるさまや一葉しふるそ乃つた　甘谷
冬の月縁るかまその高さかな　巨渠
冬枯つよ二日大焚ケハむしくり　雪人
故くさりきたや年や冬の月　少冬
みちもらそろに新なる冬枯つき　藤春
木の私乃池すこしつて冬の月　白亀
あらしふきもくさりしみそれ月起に　芝羽

冬の月何に聚ゝうらすみ　人糸
冬いまゝの岸に浅りし冬れ月　寿英
うれさをていよすてゝえたる冬れつよ　可阿
風は深く追かくれて冬の月　松丸
菜畑の白人ならて冬枯つき　十路
さりしと雲ハまさて冬の月　女 蕭
宵のちかやかかのひそれ冬田の月　楳去
風乃音のあらく中かゝ冬のつき　花尾
川ぞひふそうきけしやゝ冬の月　宇牧
さつそりとさる不柿や冬枯つよ　芦文

蓬もなふうしの霞よりそこの月　菱春
祖将のけてましさや二日乃つよ　白杉
枯枝ゆしうきそうるるそれつき　陵夕
稀なうて大盛り岑日乃傍よ　竹阜
木兎の肩となくすやそこの月　柏舟
星代家へ何とやうて雨のつき　希外
梅あれて古てれきせんそれ月　卓大
あ月ようたちらにそれ月うふ　十二才女 巧鶴
山川や貞まるゝ月えそのつよ　女 芦楨
待る守寺きやしと雨乃月　浪秋

三日月ハ只果してそこの月　又菜
月泥いつまなかしや二日乃つよ　浪山
荘老人の露ゆけるそれのつた　山居
梅より松うあれいてそこの月　和ゝ
ちりそし未張かうふそれつき　花王
高さかつそこの月さんろの中　暮山

寒月

寒月や見代ふちよのいやえふ　文旅
擂つてきゐかえてありつ寒の月　伯芝
寒月や挿りうみまりの高乃寺　花席
寒月や出へ丞つてりうるの庭　芦文

さむ月の川原なり　萩の花咲　斗山

寒月は指さすさへも冴かへり　三勝

千の雪に又来にけりて冬の月　寿圃

さむ月や川岸の上より流れ来る　後山

寒き月念仏申さて居れは　湛亭

湯加減り流れ天きさの月　菅山

其の氷の流の川付寒き月よ　車大

混雑

夏の夜や月は千金ともいふてあ　人来

橋涼やほろりと月を汲みにし　叙九

昼は程遠くより参る月夜かな　季成

会ひ来れ夏の川原につき祓　九皐

やれ明ろ木の月の夏の月夜かな　友甫

風薫る雲井の曲の月涼し　亀市

月涼し櫛も返されて呉る太　嵐文

ささ舟や見ても其ままの月涼し　巨録

白露と作りはしまふ月涼し　烏甲

月涼し芭蕉一もと隠るらん　如竹

昼うしハ草にかくれて月の出　東宗

涼るかし月夜の畑乃茶摘なる　古丸

宮守部の宿に月に出にけり　イト　一窓

見返れて又ゆるみて深夜の月　牛嶽

ふり先乃月ハ三日月のかしあ　雲常

今月の露さ新らけれ氷　凹涛

月にまかるあるさき月の色かな　几狭

取りてハ月のさかりや池の春　紫明

様しきと棹さしうる雪月花　廿長

室中や寒くりよ山月見てあかり　喇门

十月ハさしくしえの月夜かな　弓三　千賀琉

雪ふるや人事のあるる月夜かな　其中

章浜のうしかさりて月隠し　イト　巨録

白鷺やみるも月夜の水に入　北風

十月や柳さえまたふりのくま　升六

○

青ゝ盤木の芽りさるや春の風　素羽

ふるゆきしよよりの鴫　我々

海苔の香は桜に近し見えてそ　泥良齋

日くれし道うつる旅こゝろかな　林枝

錢なきは月に浮世の花桜咲　正席

すのく餅の窓さき柳杖　宇牧

春の夕にされて恋れしさに　喇川

雪のふる道のやうな長閑さ　綾窓

木枯へしぬ桜也柳の花　白亀

茎折れてしをらしさ見よしのむ　希外

千金にまさる一夜の夏は明やすし　紫江

痩るほど逢はぬ人の恋しけん　風子

ゆかしくも人の涙袂濡れ有乃桂川　葵亭

露乃葉のうちそれ咲ともなし　寸七

まさに十日明やくまなく流れ行くまゝ　一湊

鹿鳴て秋の夜老乃くりかへし　松雅

花さかり百里あまりの棚引き　拙斎

鳴る鐘の音乃さし渡る海の路　由卜

短冊に詠出し心意のちりや見え　志口

帰るさしゆきみち一夜堤　芦丈

寛神の蕙乃香れなつかしく　兆寧

旅乃道さへ恋もしの行　一窓

解るしぐ八木にちりの世を知て　澄山

清き声のする雪乃夜の雨　洪亭

夜更にも寄せさへくるゝ　多下

泪をも流す門ちり乃移ろひ　七丸

荒野にも仁名付くる鶴の声　綫仙

丸き月ろくろに廻し紙組なり　奥丈

都には世にこの人の秋乃月　諧涼

きく乃様ひの出まくり　探雫
番れハ夕高見乃芸中しく　車大
右一巡月次連

○
山吹れ笑ふゆかし風暮う　喇門
落ともしらぬ六月乃中　一湊
饒も瀬もも白く梓さして　白亀
人よりしらんの旅功者なり　巨鯨
菊植て宿れ花ゐも十日也　車大
花乃草の折ハ月まてくり　川
葉もしや沖乃寺もさきもの　湊
神よりつうる島乃掛の　亀
こちのくれ漆としい作そこうす　録

ねまり朶こしを包れなかし　大
うきつひの雫れなれるたつさく　川
うれしと一夫へ娘を討く行る　湊
薄月の空にかくれぬ節季候て　亀
押る肩そて諷ふ気ちうれ　鯨
汁市も好鯨うし持てなり　大
舟かりゐと着る雲ものいちらし　川
花の香いふても番羽乃あるる　湊
惜きをみれい人てし摘せく　亀
一りの山乃れ鳥にわしまちて　鯨

亀ほろ打乃待をほぶなり　大
こしらさ六十部の延に森さん池　川
やく吹流せ法衣乃夕雲　湊
中入の時の返すいまん迷　亀
又ゆうつきふえる緑うき　鯨
行潮もうちこそ乃葵吹合せ　大
四すの鮎ゆし小判岸しく　川
鬼案乃のかふまちつ又為るれや　湊
其角のわれ行つまを待き　宇牧
激持の夜るあつの鉢かしれ　鯨

新枕の夕へり涼し晴てしまへる　亀
又のましいつも添しにやつしん　川
鋒れうさしのまつる登代　湊
御説をも千入の雪根をみて　亀
むかふきの下部をりをを　大
驚かぬ声しいさの七日しる　牧
芹の根をとり出でさの水　鯨

○
ひく汐や弥ふもて集て夢をさる民　車大
合歓の花さまの錦のとまるてる　洪亭
けり出す古鉄舟へは月待て　業明
祖父の名を呼ての出度なり　葵亭
角文字詠もしさんまちもろ　芦丈
清めさまりしまの冬た雲　松雑
人さめぬ詠を神乃詩奉り　一粉
短夜は志の丈八を詩の那　大
あるゆへ遊をんかりうち返め　亭

仍ゑよ碁よ双六乃頁　明
旅枕尾張の名を笠ふ着て　雅
糧系りおしき名月　丈
初声は跡へ廻らる丁子れや　葵
さつくうらも衣うつなり　於
一山乃河辺の月も更けて　大
小すゝきくく松風の吹く　葵
虫の飛数知れさ花月に　丈
三月大根子をまるなり　亭
清新袷の襟も同し火を焼し　明

旅まり来さ残る　雅
牡丹文帰り朝を又合て　於
蜂蝶乃喜び法のとりしん　大
将ら二夕月牛にきふとらん　亭
さられしくて象徒の秋袋　丈
開の水汲むるけ乃糸　葵
いつも深乃付し飛口　明
山とつれの前中れ又に休みて　雅
空耳なまぬ月の夕暮　於
明保ふ人乃雨しぬ奥れ門　明

きく菜乃くてうつきる石の火　葵

忍羽ハ溌咲まで遠慮川つきて　大

来ハうり安く忘れやれきよ　亭

揚窓を花の歌く為れりふ　文

遠路乞ゝ筍乃友達　雅

よ春の花乃便りうれそえす　葵

胡うし萬丈しれされし　羽